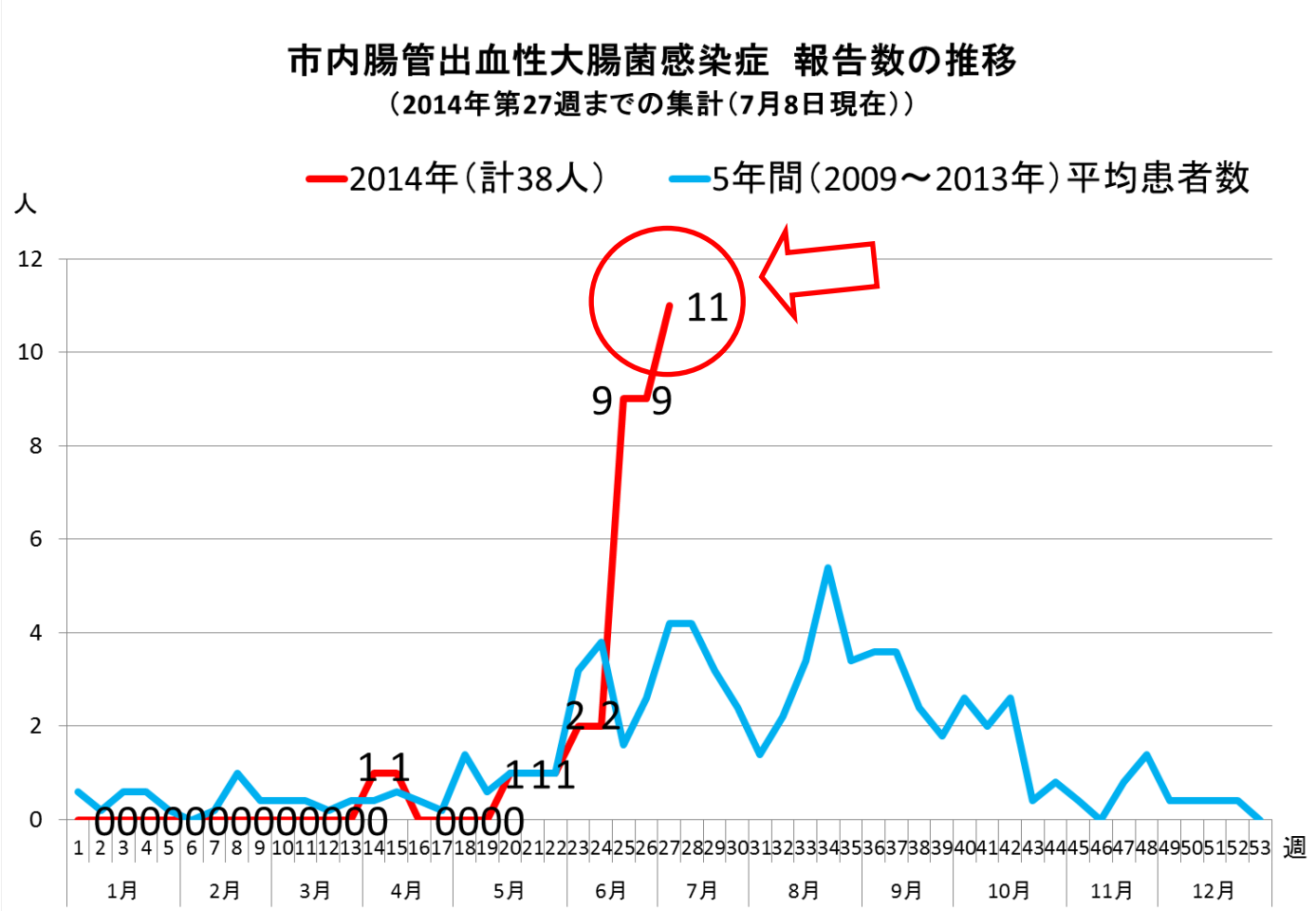
腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加しています。

◇ 6 月後半から報告が急増しており、第 27 週(6 月 30 日～7 月 6 日)の報告は 11 人で、同じ週の過去 5 年間の報告の平均値(4.2 人)の約 2.6 倍でした。

腸管出血性大腸菌感染症は、O157 などの病原性大腸菌が感染し、下痢や腹痛になり、ひどい場合には溶血性尿毒症症候群(HUS)や脳症など重症化することがあります。特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者では注意が必要です。主な感染経路は①菌に汚染された飲食物を摂取する、②患者の糞便で汚染されたものを口にする、であり、野菜などの食品を良く洗う、中心部まで加熱(75℃で 1 分間以上)することが重要です。さらに、しっかりした手洗いが重要です。症状が出た際には、自分の判断で下痢止めを飲まないで、早めに医療機関を受診しましょう。詳しくは、「O157 に注意しましょう」(衛生研究所)をご参照ください。



【お問い合わせ先】横浜市健康福祉局健康安全課　TEL 045(671)2463
横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課　TEL 045(754)9815